

和名：ジャガイモがんしゅ病菌

学名：*Synchytrium endobioticum*

英名：potato wart（略称：PW）、wart disease of potato

## 分布

インド、ネパール、トルコ、ヨーロッパ全域（アルバニア、キプロス及びギリシャを除く）、カナダ、ウルグアイ、エクアドル、ペルー、アルジェリア、南アフリカ共和国、ニュージーランド等

## 宿主植物

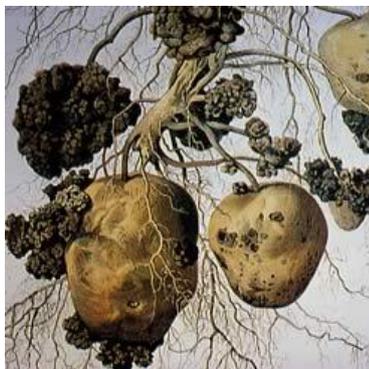
ジャガイモ等のナス科植物

## 病原体

ツボカビの一種。絶対寄生菌であり、培地で培養できない。宿主組織中で、遊走子や休眠胞子を形成する。菌糸は形成しない。遊走子のべん毛は通常 1 本であるが、有性世代の遊走子は接合後、2 本のべん毛をもつ接合子となる。接合子は宿主に感染して休眠胞子を生じ、増殖してこぶを生じる。休眠胞子は黄褐色、球形～卵形、外側が不規則な皺状の厚壁を有し、直径約 40～70 $\mu$ m。栽培ほ場や農機具に付着した土壌中の休眠胞子により伝搬する。土壌中の休眠胞子は数十年生存するとの報告がある。

## 病徴及び被害

本菌に感染したジャガイモでは、生育中の塊茎や匍匐枝にカリフラワー状のこぶをつくる（図）。また、地上部の茎にもこぶをつくることもある。初期には塊茎の潜伏芽が肥大して肉芽を生じ奇形となる。病勢が進むと、こぶの大きさは針頭大から豆粒大となり、さらに、塊茎と同じかあるいはそれ以上の大きさになり塊茎を覆うこともある。こぶは、初めは白色あるいは若い塊茎と同色であるが、次第に黄褐色からさび色、腐敗すると黒変・軟化する。植物体は枯死することなく、また、地上部の生長にはあまり影響しないため、掘上げるまで気付かないことが多い。一度本菌がほ場に侵入すると、ほぼ全ての感受性のいもに発病し、出荷不能になるとされる。



図：じゃがいも塊茎や匍匐枝に生じたこぶ